

アメリカで育てる

永住や長期滞在の子どもの教育のために

INFOE（海外子女教育情報センター）

松本輝彦

第12回 どんな方法で 日本人に育てる？ （その1）

春の教育フェアで、お母さんから「日本人に育てるには」とのご質問を多くいただきました。答えに困りました。
「私、日本人よ。日本で生活しても大丈夫！」アメリカで生まれ育った私の娘の一人の言葉です。
この言葉を信じて、この子を育てた我が家の工夫と仕掛けを紹介します。皆さんの参考のなりますか、どうか？

私の「体験的、子どもを日本人に育てる方法」です。長話に、お付き合いください。

まず、家庭での日本語

皆さんは、アメリカに住んでいます。子どもの日本語環境は、家庭・友達・補習校と、限られた範囲にしかありません。その中でも、家庭での生活時間が最も長く、子どもの言葉や文化の形成に大きな影響があります。家庭での日本語環境作りが、子どもを「日本人に育てる」第一幕です。

まず最初に、これからのこのコラムの話題の中に繰り返してきますので、我が家の3人娘の話です。

我が家の3人娘

我が家の場合、1歳半で日本から連れてきた長女に続き、私が留学していた大学の病院で2人の娘が生まれ、7・5・3歳と2歳違いで3人になりました。

年齢に近い女の子3人は、自分達だけでコミュニティを作ります。一緒に遊びます。語彙の豊富なお姉ちゃんが、妹達に知識や言葉を教えます。外で憶えてきた遊びや話を、姉妹3人で共有します。3人でケンカや意地悪もします。上2人で三女をいじめるかと思えば、下2人で長女に反撃です。その自由な組み合わせで、いじめたり・いじめられたりして、社会性が育ちます。

「三人を育てるのは大変だったけど、子ども同士で多くのものを身につけてくれたね」と、夫婦でよく話します。特に、家庭内での日本語の習得には、3人という人数が大きなプラスになりました。

皆さんの場合は、お子さんが一人という方も多いと思います。友達を作ったり、お母さんが友達代わりになったりして、子どもと一緒に成長していくのが、一つの方法です。

読み聞かせ

我が家の3人娘の日本語、特に読み書きの基礎を作ったのは、「日本語の本の読み聞かせ」だと確信しています。

お父さんはいつ帰ってくるか分からないので、お母さんの仕事です。子どもの好きな本を、毎日、読んでやるだけのことです。この簡単な仕事が大変です。我が家のお母さんはがんばりました。毎日、3人の為に、1時間から2時間の読み聞かせを、子どもが赤ちゃんの時から小学校高学年まで何年間も続けました。時には、同じ本を3回読む日もありました。

もちろん、時々は、若い頃演劇を目指したこともあるお父さんも臨場感豊かな(?)読みで手伝いました。しかし、「お父さん、おかしい」とピエロ役に終わってしまいました。

そのとき子ども達が読んでもらった童話や本は、我が家の何度もの大規模な不用品廃棄処分を乗り越えて、今でも本棚で次の出番(孫?)を待っています。子ども達にとって宝物です。

旧仮名遣いやカタカナで書かれた東京裁判の記録を英語に訳していく我が子の日本語の力は、毎日毎日「読み聞かせ」を続けた我が奥様の「勲章」です。

読み聞かせの効果は、親子一緒にの時間や物語のおもしろさを楽しむだけではありません。会話文だけではなく書かれた文章に日常的に接することにより、小学校中学年以上の日本語での「読み書きの学習」の基礎を形成します。アメリカでの滞在が長くなった子どもの中に、日本語の読み書きの学習に入る小学校4・5年で補習校が続かなくなる子が多くいます。この段階を切り抜けないと、日本語が学習言語として定着せず、日英のバイリンガルにはなり得ません。